寄稿

作る楽しさを子どもたちに
～自立を支える〝弁当の日〟～

〝弁当の日〟が全国に１８００校を超えて広がっていますが、〝弁当の日〟という言葉を聞くだけで「学校給食がなくなる?」「子どもの弁当を作りたくない」「弁当を持ってこられないかわいそうな子をどうする気だ」等の保護者や教師からの反響が返ってきています。

私は38年の教員生活を経て、定年退職後６年目を迎えています。子どもだけで作る〝弁当の日〟を２００１年に香川県・滝宮小学校校長時代に提案して、実施しました。その〝弁当の日〟は今年滝宮小学校では16年目を迎えています。続いているのです。だから、〝弁当の日〟を経験した子どもたちがもう立派な大人になり、結婚し、親になった子もいます。二つ目の高松市立国分寺中学校の生徒も13年目、三つ目の綾川町立綾上中学校は９年目です。〝弁当の日〟に取り組んだ彼らが大人になって言ってくれているのです。「〝弁当の日〟をやらせてくれてありがとうございました。」

私がスタートさせた〝弁当の日〟は三つのルールがありました。

一つ目は「子どもだけで作る」です。献立、買い出し、調理、弁当箱づめ、片づけのすべてを子どもだけにやらせるのです。「親は手伝わないでください」と訴えました。

二つ目は「5・6年生だけ」です。いま全国の小学校のほとんどで学校給食があります。〝弁当の日〟を実施するということは給食をストップすることになるのですが、それを5・6年生に絞ったのです。小学校では5年生から家庭科の授業が始まります。「弁当作りに必要な知識と技術は学校で1学期に教えます。ご家庭で教える必要はありません」と説明しました。

三つ目が「10月から2月までの第3金曜日に実施します。全部で5回」です。

4月末のＰＴＡ総会で私は学校経営について説明しました。〝弁当の日〟という言葉を聞いた途端に保護者たちからはブーイングがありましたが、三つの決まりを説明するとおさまりました。「学校週5日制が今年度（平成14年度）から完全実施になります。保護者は仕事に出かけるのに子どもは休日という土曜日が増えました。そんな日に5・6年生が『弟や妹のお昼ご飯はぼくが家にある材料を使って作って食べさせるから』と言えるようにします。くれぐれも子どもたちの弁当作りを手伝わないでください。」

ＰＴＡ総会の一か月前の3月末にＰＴＡ役員の二人の母親を校長室に呼びました。〝弁当の日〟の事前周知が目的でした。即座に反対されました。理由は「包丁を持たせていない。ガスコンロにさわらせていない。早起きできるはずがない」でした。予想どおりの反対意見でした。「信じてまかせれば子どもは結構やるものです」といって

竹下　和男

1949 年香川県生まれ。香川県教育委員会、小学校校長、中学校校長などを経て、2010 年に定年退職。現在はフリーで講演や執筆活動に取り組む。2003 年に「地域に根ざした食育コンクール」で農林水産大臣賞を受賞。2014 年に第８回キッズデザイン賞、消費者担当大臣賞を受賞。2015 年のミラノ万博日本館では、世界に向けて〝弁当の日〟が紹介された。著書に『〝弁当の日〟がやってきた』（自然食通信社）、『弁当づくりで身につく力』（講談社）、『お弁当を作ったら』（共同通信社）、『泣きみそ校長と弁当の日』（西日本新聞社）など。

帰っていただきました。滝宮小学校の教職員も乗り気ではありませんでした。この取り組みは文部科学省（当時は文部省）や教育委員会が考えている教職員の職務内容を逸脱しています。いろいろな事故や、不満を持った人たちの反発も簡単に想定できました。だから校長一人による明らかな見切り発車でした。ほとんどの児童が簡単な調理さえもできない実態を知っていましたから、事故の心配は多分にありました。〝弁当の日〟初日の未明に、私は自宅の2階ベランダから滝宮小学校校区を見回していました。「火の手が上がらないでほしい」と神に祈っていたのです。

38年間の教員生活と言っていますが、3年間ずつ3回、つまり9年間の県教育委員会勤務がありました。あとは小学校教諭9年間、中学校教諭7年間、中学校教頭3年、小学校校長3年、中学校校長7年です。勤務地は11回変わりました。

滝宮小学校に校長として赴任したのが2000年で、小学校勤務は16年ぶりでした。子どもたちの様子が劇的に変わっていました。子どもらしい元気さが減っていたのです。端的な場面が給食の時間でした。16年前は小学校5年生の学級担任でした。給食はみんなが奪い合うように食べましたから、毎日「食べ残し」はなかったのです。ところが目の前の子どもたちはそうではありませんでした。もちろん16年前のようにしっかり食べる子どもたちが主流ではありましたが、気になったのは全く食が進まない子どもたちでした。全校児童の約5％くらいです。みんなが食器の片付けをしていても、急いで食べようともしません。完食させようと根気よく指導している先生をはぐらかすようなそぶりが見えます。食べきることは意識になく、先生が諦めてくれるのを待っているのがありありと分かります。食事が、先生と児童の根競べになっているようでした。

その16年間とは中学校10年、教育委員会6年です。その間、普通に食事ができない（あるいは、しない）中学生は見たことがありませんでした。この16年間に何が起きたのだろう。強烈な疑問でした。

校長勤務の1年目が終わるころ、町学校給食理事会がありました。管内の保育所・幼稚園・小学校・中学校に給食を提供している理事会で、給食費の決定や食材納入業者の選定、献立の作成をしています。事務

局が町教育委員会で町長・議長・教育長・校長・栄養士・調理員代表が出席します。

「子どもたちに安くて、できたてで、美味しい給食を提供したい」と町のトップ3名の共通した姿勢でした。管内は学校ごとに調理場・ランチルームを建設していました。施設・設備だけでなく人件費も多くかかる自校調理方式を維持すると宣言したのです。

２００１年というのは全国でセンター方式の学校給食が本格的に広がっていた真っ最中です。この流れは現在も続いています。最大の理由が経費節減です。50～６００食の給食を作る調理場を8か所に作るより、２０００食の提供ができる共同調理場一つの方が設備費も人件費も安くあがることは簡単に理解できます。町内の学校給食を統一献立にしたのは、食材を一括購入することで給食費を安く抑えるためでした。

だから、町のトップ3名の姿勢は全国に誇ることができることなのです。感銘した私が小学校長としてできることを学校給食理事会の間、考え続けました。「子どもたちに学校給食に対する感謝の気持ちを育てることが校長の職務だ。さて、どうすればいいのか。」

そうして思いついたのが〝弁当の日〟ですが、「指の切断や火災による死者のような事故が起きたら、全財産を補償金に使い、行方不明になる」と決めていましたから、〝弁当の日〟準備段階中から責任のすべてを背負うつもりでいました。

結果的に滝宮小学校では2年間〝弁当の日〟を実施して国分寺中学校に異動することになりました。その時の卒業生に送った言葉を卒業文集から引用します（左上囲み）。中心の20文は、全ての文で、前半は状況を過去形で表現し、後半は子どもを称える表現をとりました。

〝弁当の日〟を始めたときから考えていたことですが、児童にも教職員にも保護者にも内緒にしていました（だから正しくは、最後から2行目はウソを書いています）。「体験から気づかせたい」という思いがあったからです。この詩の内容を事前に知らせると教職員は達成率をあげるために指導方法を工夫しますが、その作為が児童にはうまく伝わらないと思っていました。また私自身が20項目の意味を子どもたちが理解するのは10年後でも20年後でもいいと考えていたのです。

〝弁当の日〟の初日の朝、5・6年生の4組、１２６人は興奮状態でした。登校してきた子どもたちが弁当箱を開けて教室、廊下、他の教室でうろうろと歩いているのです。自分が作った弁当を見せっこしていました。「作ったぞ！」と満面の笑みを浮かべていました。でもどの子も「全部」とは言っていません。20歳になった彼らが成人式の後の同窓会に呼んでくれました。彼らの話によれば「一回目に自分一人で作った子はいないと思う。でも5回目はほとんどの子が自分で作っていたと思う。調べる必要ないんです。顔見れば分かるから。」

滝宮小学校で2年間、〝弁当の日〟を実施して、アンケートで子どもたちの成長を確認しました。1年目の5・6年生は知識も技術も意欲も同レベルでスタートし、同レベルに向上しました。つまり、ほぼ台所に立つことなく日々を送っていた子どもたちだったのです。ところが2年目はスタートから状況が変わりました。つまり、この年に5年生になった子どもたちのレベルが〝弁当の日〟を始める前から高いのです。それは、彼らが4年生の1年間で、〝弁当の日〟を見越して台所に立ってきたということでした。それは予想通りだったので、私は一人ほくそ笑み

弁当を作る（平成14年度　滝宮小学校の卒業生に贈ったことば・卒業文集への寄稿）

あなたたちは、「弁当の日」を2年間経験した最初の卒業生です。
だから11回、「弁当の日」の弁当づくりを経験しました。
「親は決して手伝わないでください」で始めた「弁当の日」でしたが、どうでしたか。

食事を作ることの大変さが分かり、家族を有り難く思った人は優しい人です。
手順良くできた人は、給料を貰える仕事についたときにも、仕事の段取りのいい人です。
食材が揃わなかったり、調理を失敗したりしたときに献立の変更ができた人は、工夫できる人です。
友だちや家族の調理のようすを見て、技を一つでも盗めた人は、自ら学ぶ人です。
微かな味の違いに調味料や隠し味を見抜いた人は、自分の感性を磨ける人です。
旬の野菜や魚の、色彩・香り・触感・味わいを楽しめた人は、心豊かな人です。
一粒の米・一個の白菜・一本の大根の中にも「命」を感じた人は、思いやりのある人です。
スーパーの棚に並んだ食材の値段や賞味期限や原材料や産地を確認できた人は、賢い人です。
食材が弁当箱に納まるまでの道のりに、たくさんの働く人を思い描けた人は、想像力のある人です。
自分の弁当を「美味しい」と感じ「嬉しい」と思った人は、幸せな人生が送れる人です。
シャケの切り身に、生きていた姿を想像して「ごめん」が言えた人は、情け深い人です。
登下校の道すがら、稲や野菜が育っていくのを嬉しく感じた人は、慈しむ心のある人です。
「あるもので作る」「できたものを食べる」ことができた人は、たくましい人です。
「弁当の日」で仲間がふえた人、友だちを見直した人は、人と共に生きていける人です。
調理をしながら、トレイやパックのゴミの多さに驚いた人は、社会を良くしていける人です。
中国野菜の値段の安さを不思議に思った人は、世界を良くしていける人です。
自分が作った料理を喜んで食べる家族を見るのが好きな人は、人に好かれる人です。
家族が手伝ってくれそうになるのを断れた人は、独り立ちしていく力のある人です。
「いただきます」「ごちそうさま」が言えた人は、感謝の気持ちを忘れない人です。
家族が揃って食事をすることを楽しいと感じた人は、家族の愛に包まれた人です。

滝宮小学校の先生たちは、こんな人たちに成長してほしくって2年間取り組んできました。
おめでとう。これであなたたちは、「弁当の日」をりっぱに卒業できました。

ました。
「あこがれにあこがれる」と言っています。上級生をかっこいいと思ったら、子どもはそんな上級生のようになりたくて自分から行動に移る意欲が湧いてきます。これを内発的動機付けといいます。2年目の6年生は5月にも実施したので2年間で11回の〝弁当の日〟を経験しましたが、こんな言葉を私に告げてくれました。

「校長先生、今日は朝早く起きて一人で弁当を作りました。一回目はお父さんやお母さんが心配をして台所で見守ってくれていました。弁当を作っているとき分からないことがあると教えてもらっていました。手伝ってもらったこともありました。でも〝弁当の日〟を繰り返すたびに少なくなっていき、今日はたった一人で作りました。だから、弁当が完成したときお父さんもお母さんもまだ寝ていました。たった一人で作れたことがうれしくて登校しているときも楽しかったのですが、気づいたことがあります。

校長先生、ぼく、お米を作っていません。野菜を作っていません。弁当箱の中のシャケ、捕まえていません。シャケを捕まえてくれた人がいます。その人が乗った船を作った人がいます。とったシャケをトラックに乗せて運んだ運転手がいます。そのトラックを作った人がいます。そのトラックが走った道を作った人がいます。台所で鍋やフライパンを使いました。作ってくれた人がいます。ガスや電気をぼくの家に届けてくれた人がいます。弁当箱の向こうにたくさんの人が働いてくれています。その人たちに感謝の気持ちを伝えたいけれど、会ったことがありません。顔も名前も知りません。

校長先生、やっとわかりましたよ。この弁当ひとつ、ぼくひとりじゃ作れない。」

子どもは体験から多くのことを学びます。例えば〝弁当の日〟スタートに際して保護者に「たった一人で作ることは難しいから手伝ってあげてください」といえば事故のリスクは激減します。でも子どもの成長する能力も激減します。子どもが、自分でできないことは保護者に依存するからです。けれども「自分だけで献立から片付けまで」ということになればすべての場面で自立することを目指して、日々、生活していくことになります。買い出しも下ごしらえも片付けもすべてです。

江戸時代は平均寿命が45歳くらいだったそうです。単純に計算すれば、親が25歳の時に生まれた子が20歳になったとき、その親の寿命は尽きるのです。

戦後70年が過ぎました。戦後しばらくは、日本は農業国でした。農業が基幹産業で国民が貧しい実態だったから田植えや稲刈り時は「猫の手も借りたい」と忙しさを表現していました。これは家族総出でも忙しさが残っていたことを意味しています。つまり、少年期

の子どもも全員働いていました。私が小学生だったころは「農繁休業日」という休日がありました。田植えや稲刈りを手伝わせるために学校が全校で休日になりました。英語や数学の授業より家事労働を優先させるという価値観が優勢だったのです。

現在の文部科学省は子どもたちに労働を体験させる大切さを知っていますから「職場体験学習」を学校教育に取り入れていますが、昔の「農繁休業日」と比較すると生活に密着していない仮想世界の印象を否めません。

〝弁当の日〟は100％、家族の生活と密着しています。例えば弁当箱に入れる卵焼きは2切れか3切れですが作るときは1本です。カラアゲも2～3個ですが、油で揚げることを考えれば家族全員分を作ることになります。ご飯だって、弁当箱に入れる分だけ別に炊くことはしません。つまり自分一人の弁当を作ることが家族全員の食事につながってくるのです。

〝弁当の日〟は食事を作ってもらっている側が、作ってあげる側を体験するということです。この体験が自立を促していくのです。自立したい幼い子が台所にやってきていいます。「お母さん、わたしにも料理やらせて」「できるようになりたい」「ぼくに手伝えることある？」そんなとき、今時の親は子どもの未来より、自分の今を優先します。「テレビ見ていていいよ」「学校の宿題があるでしょ」という背景に「子どもに手伝わせるより、自分一人でした方がはやい」と考えているのです。子育てで多忙さが増す実態は昔の比ではなくなっていますが、自立できていない若者、親世代の増加は深刻です。

子どもたちの学歴や一芸（スポーツも）の競争は過熱しています。そのために注ぎ込まれるエネルギーの大きさにかなりの子どもたちが疲弊していますし、衣食住の基本でさえ身についていません。それが社会人としてスタートしても30％は3年持たないという原因の一つになっていると考えています。勝ち組のはずの新入社員が退職することになった最もつらい言葉が「そんなこともできないのか」というものです。私は家族と共に過ごす衣食住に関わる時間を「くらしの時間」と言っています。この時間が子どもの自立の基礎になります。その場面を〝弁当の日〟で全国の子どもたちに与えようとしているのです。

こんな〝弁当の日〟が日本の農業の未来を明るくさせると考えています。確かな味覚を育て、食材の価値を知り、食べる喜び、食べてもらう喜びが子どもを力強く育てるからです。